

*英語から日本語への直訳したため、日本語が不自然な箇所がありますが何卒ご容赦ください。

プロのサッカークラブが存在しない9都道府県のうち一つということから、三重県の人々はサッカーにあまり興味がないのかと思われるかもしれない。しかし、それは全くの見間違いだ。名古屋市からほど近くということは、Jリーグ創立の立役者、名古屋グランパスエイトが、長年三重県民からも熱烈に支持されてきたことを意味する。そして、近年三重県内からも、F1で有名な鈴鹿サーキットがある鈴鹿市で活動する鈴鹿アンリミテッドFC、桑名市をベースとするヴィアティン三重、そして南勢地区を代表するFC伊勢志摩など、全国を舞台に活躍できるチームを作ることを目標としたサッカークラブが台頭してきている。

この3つのクラブは、日本のサッカーリーグピラミッドの5部にあたる地域リーグのひとつ、東海社会人サッカーリーグ一部に在籍している。このリーグは、三重県、愛知県、岐阜県、静岡県より8つのアマチュアおよびセミプロのクラブによって構成されており、優勝クラブは、全国地域サッカーチャンピオンズリーグへ駒を進めることができる。そして、日本のノンリーグの頂点、JFLへの昇格をかけ、全国各地の地域リーグ優勝者と戦う。2016年シーズンの東海リーグでは、優勝をかけ三重県の3つのクラブとFC刈谷が熱い戦いを繰り広げた。

クラブへ連絡を取る前に、まずは三重県のサッカーの歴史を詳しく知るため、2016年4月の三重県社会人サッカー選手権大会の決勝にて、三重サッカー協会の専務理事の九鬼慎次氏へ取材を行った。その日の試合は、鈴鹿アンリミテッドFCがヴィアティン三重を熾烈な戦いの末2-1で下し、クラブにとってその年で最初の大会優勝を飾った。そして、その試合は東海リーグに在籍する全てのクラブにとって簡単な試合はないと示していた。たくさんの強豪クラブが昇格をかけて戦う現状を見て、過去にも三重県内でプロのサッカークラブを作ろうとする動きがあったのか知りたいと考えた。

「四日市でありました。」九鬼氏はこう語った。

「ちょうど1994年、Jリーグが出来る出来ないかの時に、コスモ石油という企業がチームを持っていて、日本の今のJ2位のレベルでやってたんですよ。Jリーグができた時には、プロリーグに参入するかどうかということのを会社が検討していたんですが、最終的にはコスモ石油が撤退するということになりました。四日市の市民が動いて、協賛の企業をあたったりだとかしましたが、結局ダメになった。」

このような明確な試みが、過去に既にあったことは大きな驚きだった。では、コスモ石油四日市FCにも多くのファンが存在していたのだろうか。

「そうですね。今のFC東京とか川崎フロンターレとか柏レイソルとかと、コスモ石油四日市は同じ土俵でやっていたもので。」

九鬼氏が例に挙げたクラブは、今やJ1の強豪クラブへと成長している。柏レイソルは、2011年にJリーグで優勝した9つめのクラブとなり、FC東京や川崎フロンターレはそれぞれ過去2シーズン連続で2万人以上の平均観客数を記録した。

当時、四日市市にスポンサーが不足していたことによって、三重県にプロのサッカーチームを作る機会が失われたのだという印象を持った。そこで、三重県内で3つものクラブがJリーグを目指している今は状況が異なるのか九鬼氏に訊ねた。

「今、全国でもJリーグに入ろうとしているチームがたくさんあるので難しいですね。三重県サッカー協会としても、プロのクラブができるのが望ましいですが。」

九鬼氏は、三重県のサッカークラブの将来に対して慎重な姿勢を示し、また警告を発した。

「個人的に、本当にスポンサー依存度が高い方がいいのかなというところがあって。成績が悪ければ企業が撤退して、高い水準を維持するためのお金がなくなって落ちてしまったりだとか。そういったことが、すでに結構起きているわけです。本来、地域にもっと密着目指したチームや組織作りだとか、地域に貢献することが重要で。今ちょっとJリーグも違う方へ向かっているんじゃないかなと感じているんです。」

九鬼氏との会話を楽しんだ6ヶ月後、Jリーグ参加への野心をもった三重県のクラブの一つである鈴鹿アンリミテッドFCについて調べに三重県を再び訪れた。その頃、東海リーグ一部のシーズンは終わりに近づいており、鈴鹿アンリミテッドFCにはまだ全国地域サッカーチャンピオンズリーグに進出するチャンスが残っていた。今季の東海リーグで数ある三重県ダービーマッチのひとつ、FC伊勢志摩を相手にホームゲームが行われるAGF鈴鹿陸上競技場にて、取締役の吉田雅一氏にインタビューする予定を取り付けた。

ホームチームの鈴鹿アンリミテッドFCは6-0で完勝し、圧倒的な成績で東海リーグのトップに君臨するFC刈谷の次点となることが決定した。私にとって日本でこのレベルのリーグ戦を観戦することは今回が初めてであり、その日の選手達のパフォーマンスは嬉しい驚きだった。彼らは体力があり、よく統率が取れているだけでなく、ポゼッションが高い。そして、キャプテンの小沢司選手という質の高いアタッカーが在籍している。J2の水戸ホーリーホックで120試合に出場した経験を持つ小沢選手は、まだ28歳であり、鈴鹿アンリミテッドFCがJリーグに昇格するための要になるだろう選手だ。

また、私は鈴鹿アンリミテッドFCのセンターバックである藤井竜選手にも注目した。六ヶ月前の三重県社会人サッカー選手権大会の決勝で、その自信溢れるプレイが印象に残った藤井選手は二度目の観戦でも見事だった。ディフェンダーとして、プレッシャーの元でも冷静にボールを捌き、ドリブルでミッドフィールドまでボールを運ぶ事ができる。また、長いパスと短いパス共に飛距離もよく、ボールを相手に渡してしまうことも少ない。プレミアリーグのバーンリーで活躍しているイングランド人サッカー選手、ジェームズ・ターコウスキーを思い起こさせるプレースタイルを持つ藤井選手は、より上位のリーグでも難なく活躍できる選手だと確信している。

今回、格下の相手と戦ったにも関わらず、鈴鹿アンリミテッドFCの選手達はより高いレベルでプレーする能力をもっているように見えた。そして、そのように考えているのは私だけではなさそうだった。この日を含め、今シーズン中の試合毎に平均して800人ほどの観客が訪れ

た。それは、上位のリーグに在籍する多くのチームの平均来場者数を上回る数字だ。また、たくさんの子ども達が声を張り上げて応援している姿を目にして、彼らが地元のチームをサポートすることを楽しんでいることを嬉しく思った。

試合終了後、メインスタンドの裏でイベントを取り仕切る吉田氏を見つけた。35歳の吉田氏は、取締役としてはかなり若い。そこで、彼がなぜ鈴鹿アンリミテッドFCに関わるようになったのか問いかけた。

「出身が三重県亀山市っていう、鈴鹿市の隣の町なんですよ。25年前にちょうどJリーグができた時に、鈴鹿スポーツガーデンで名古屋グランパスの試合を見て、いつか名古屋じゃなくて地元のチームがあればいいなと思ってずっと成長してきて。それで、鈴鹿に戻ってきて、サラリーマンとしてクラブで働いています。」

今までに、吉田氏が取締役として監督した最も大きな決断のひとつは、鈴鹿ランポーレから鈴鹿アンリミテッドFCへのクラブ名の変更だ。この変更は、2016年シーズンから施行された。「前のオーナーがランポーレの商標権をもっていて、それを引き継げなかったので変えました。」と、吉田氏は説明した。しかし、なぜ「アンリミテッド」なのだろうか。日本のエキセントリックなクラブの名付けの慣習をしても、珍しい選択だ。

「今、日本のクラブ名って造語が多いじゃないですか。アルビレックス（新潟）とか。でも、他の国の人には意味を理解されないの、英語という国際言語で付けるのが世界に出て行くのに有効だと思ったんです。」

ピッチ上でクラブの活躍を目にした後、吉田氏が2016年シーズンの結果に満足しているかに興味を持った。

「一言では難しいですけど、まだわからないです。JFLに上がれなかったら失敗。JFL昇格、リーグ戦での優勝が目標だったので。（鈴鹿アンリミテッドFCにとって最も悪かったことは、）やっぱり優勝できなかったことにつきるかな。正直、先週試合するまで勝つと思っていたので。13連勝しているの、やはりFC刈谷は強い。」

ピッチ上でのパフォーマンスに関しては、今年はクラブの計画通りにいかなかったことを感じとった。特に、5人のプロ選手を抱えていることと、JFLに在籍するクラブと同等の予算があることを吉田氏がほのめかしたためだ。成功を治めるために、クラブが大きな投資をしたことは明らかである。では、舞台裏の活動の成果はどうなのだろうか。この質問に対しては、吉田氏は明るく語った。

「自分の立場から言えば、地域との関係性がどんどん良くなっているっていうことですね。イオンモール鈴鹿で旗もたくさん出ているし、地元のトラック会社さんもクラブのシールを貼ってくれて、80台のトラックが町中走ったりしているの。」

「地元の学校をまわってサッカー教室をひらいたりもしています。子どもが興味をもって、ご両親やおじいちゃんおばあちゃんも来たら、ファンが増える。あとは、来年以降やりたいんで

すけど、イオンモール鈴鹿からバスを出すこと。イオンには、週末に3万、4万人が来るんですよ。みんな車で来て、買い物して、バスで試合にくる、試合が終わったらまたイオンに帰って過ごすという。」

「(でも、) まずは結果を出さないといけない。試合がついてくれば、町はついてくると思うので、結果で示すしかないかな。25年前に、鈴鹿スポーツガーデンで年に1回Jリーグの試合をやっていたんですけど、毎回満員。そういった人たちが待っているんです。今は鈴鹿を代表しています。もちろん鈴鹿だけじゃJリーグでやっていけないので、将来的には、亀山、四日市、津あたりをメインとしたい。」

鈴鹿アンリミテッドFCと、ヴィアティン三重とFC伊勢志摩は、似たような志を持っている。そこで、吉田氏にライバル同士の競争について問いかけた。三重県に複数のJリーグチームが同時に存在することは有益なのだろうか。以前取材した九鬼氏はこの意見に肯定的だったが、吉田氏はやや否定的な見解を示した。

「正直言うと、あまりよくないと思う。もしJリーグのクラブが同じ地域にあっても、新規ファンの獲得だとか、お互いに負けたくないからという所でコストを使ってはいけないと思うんですよ。宣伝をしたりとか、同じ県のライバルと競うためには使いたくない。」

鈴鹿アンリミテッドFCがいくらJリーグ昇格の野望を掲げようと、適切なJリーグのライセンスを得なければプロリーグへの参入は叶わない。まず、ノンリーグのチームが歩むべき第一歩は、100年構想クラブに承認されることだ。承認されるには、プロの自主独立体として組織が機能する準備が整っていることを示す多くの基準を満たさなければならない。旧鈴鹿ランポレとしては、この基準を満たすことができず承認されなかった。しかし、新しいオーナーを持つ今、吉田氏は明るい未来を予想していた。

「100年構想クラブへの申請は、近い将来出したいと思っています。実は、以前鈴鹿ランポレの時にしたことがあって、その時は受理されなかったんです。その時に、財務内容と地域との関わりや盛り上がりというところで指摘があった。財務内容は、親会社が変わったのである程度安定してきている。あとは、どれだけの地元の人に来てくれて、どれだけの地元の会社がサポートしてくれているかということですね。今回は、チャンスがあると思います。」

鈴鹿アンリミテッドFCがJリーグへ昇格するまでにどのくらい時間がかかることを予想しているのか吉田氏に迫った。

「クラブとしては2年以内にJ3に入りたい。5年後、J2。10年後、J1。今、三重県でいえば、鈴鹿スポーツガーデンがJ3までできるスタジアムなんです。」

しかし、吉田氏は、本当に三重県にはJ1のチームを支えるポテンシャルがあると思っているのだろうか。

「私の思いついたところはありますけど、可能だと思います。J1でも、スタジアムに一万五千人入れればいいですよ。一万五千ってそんな大きくないキャパシティ。三重県には、工場が多くてお金持ちが多いので、財政的には全然できるんじゃないかなって思う。」

私達は、もし鈴鹿アンリミテッドFCが昇格したら、クラブにどのような変化をもたらす可能性があるかを話し合った。その中で、最も大きな問題として上がったのは、チケットの価格だ。現在、試合への入場は無料だ。しかし、一つ上のリーグへ上がれば、チケット代は1500円まで上がる可能性がある。それは、短期的に来場者数にマイナスな影響を与えるだろうと吉田氏は考えている。特に、東海地域だけでなく日本全国各地のクラブと対戦することになり、アウェイゲームの来場者数が大幅に減ることも予測されるためだ。

二つ目の問題は、スタジアムについてだ。もし鈴鹿アンリミテッドFCがJ3より上のリーグに上がることになれば、Jリーグが提示するJ1とJ2の試合を開催するための必要条件を満たすスタジアムを確保しなければいけない。そのためには、鈴鹿スポーツガーデンを改善するか、新しいサッカースタジアムを建てる必要があるが、どちらも三重県と鈴鹿市の行政の助けがなければ、クラブだけではなし得ないと吉田氏は語った。残念なことに、日本の地域行政はスポーツ分野に優先を割り当てることは少なく、このようなインフラプロジェクトを行政が積極的に援助することはまれだ。しかし、鈴鹿市では状況は異なるのだろうか。ここでも、吉田氏はポジティブな意見を呈した。

「鈴鹿市には鈴鹿サーキットもあるし、国際イベントを経験しているので、（鈴鹿アンリミテッドFCを）サポートする力はあると思う。（鈴鹿市はスポーツの重要性を）理解していると思う。鈴鹿にはモータースポーツ課があるので。市をあげて盛り上げる気持ちは、F1に対してはある。サッカーに対しても同じことと思っているので。来年JFLに上がった時に、このスタジアムは温水シャワーに変えないといけないですよ。それは鈴鹿市に頼みます。」

吉田氏は、今までの進歩に概ね満足しているように見え、クラブの将来に対しても前向きだった。インタビューも終わりに近づき、最後になぜ鈴鹿市でサッカークラブが成功する可能性があると思うのか吉田氏に問いかけた。

「あるエコノミー雑誌で、日本でいうスポーツの町は、という質問で鈴鹿は一位を取っているんですよ。鈴鹿っていうのはモータースポーツが盛んなのだが、実はサッカーも可能性は秘めている。」

しかし、日本のモータースポーツの聖地で、サッカーは人々の興味をひけるのだろうか。

「これは、すごいチャンスなんですよ。チーム名を三重にするか、鈴鹿をキープするかっていう議論になったんです。鈴鹿イコールF1というふうに捉えられるのではということで。でも、サッカーっていうのは世界的に人気のスポーツなので、サッカーの鈴鹿っていうのもインプットしていきたい。」

※この記事を書き終わった後、鈴鹿アンリミテッドとヴィアティン三重の両チームが全国地域サッカーチャンピオンズリーグのファイナルまで勝ち残った。この2チームが最後のJFL昇格

枠を争った結果、4-1でヴィアティン三重が鈴鹿アンリミテッドを下した。2016年でヴィアティン三重が鈴鹿アンリミテッドとの対戦で白星を挙げたのは、この試合が初めてだった。

取材・文：クリス・ウォームズリー